

ス軍兵士がナイル川河口の町ロゼッタの土の中から発見していたものです。



Rosetta Stone (レプリカ)
(本学図書館所蔵)

その後、模倣資料に基づいてロゼッタ・ストーンは『エジプト誌』に収められますが、この石には3段にわたって3つの言語による文章が刻まれていました。上段にはヒエログリフとよばれる象形文字、中段にはデモティックと称される民用文字、下段にはギリシア文字が彫られており、特にヒエログリフについての理解には時間を要し、フランスの言語学者ジャン＝フランソワ・シャンポリオン（1790-1832）ら、多くの学者の努力により20数年を要して漸く1822年に解読されました。これは、ナポレオンが死去した翌年のことです。

3つの文章の内容はいずれも同じもので、紀元前196年、プトレマイオス5世エピファネスの善政を称えた石碑であることが判明しました。また、これは古代エジプト語と2世紀以降のエジプト語とされるコプト語の深いつながりを証明したものとして、言語学的にも意味のあるものとされています。

ちなみに、ロゼッタ・ストーンの前物を戦利品として持ち帰ったイギリスは、現在も大英博物館で展示しています。

さて、このヒエログリフの解読に中心的な役割を果たしたシャンポリオンは、1824年に解読作業からさらに発展させた研究書*Précis du système hiéroglyphique des anciens Égyptiens*（『古代エジプトの象形文字体系概説』・写真）を上梓しました。幼いころから語学に才能を示した彼は、ヘブライ語、アラビア語、シリア語、さらにエジプトのコプト語などに通じていたといわれます。ナポレオンのエジプト遠征に刺激

されてエジプト研究の道に入ると、18歳でグルノーブル大学歴史学科の助教授となり、ヒエログリフの解読に携わってそれを成功させたことは前述の通りです。



Précis du système hiéroglyphique des anciens Égyptiens. 2 vols. Paris, 1824.
(本学図書館所蔵)

この書物の内容は古代エジプトの象形文字体系の研究書で、ヒエログリフを宗教文字と捉え、その文字上の要素と文字と文字との様々な組み合わせや、自分たちの研究システムと他のエジプトのグラフィカルな方法との関係を書いたものです。これはロゼッタ・ストーンの前作のヒエログリフが解読されて2年後に成立した著作で、図版と説明を持つ全2巻で成っています。

このヒエログリフは、紀元4世紀ころまで使用されたといわれます。それらがナポレオンの遠征で発見され、シャンポリオンの業績によって漸く解読が可能になり、長いエジプトの歴史を紐解く基本的な部分が明らかになったのです。そして今日では、ナイル川の相次ぐ氾濫によって流域では肥沃な大地が作られ、紀元前5000年ころから農耕をもとにした文明が発達していたことがわかっています。また、紀元前3000年ころになると統一国家が成立し、紀元前1100年前後には20ともいわれる王朝の興隆と没落が続いたこと。これらの王朝は強大な権力を基盤にしてピラミッドや神殿を作ったこと。さらに、象形文字を伝達手段として、測量術や天文暦法などの科学技術があったことなどが判明しました。

■様々な議論をこえて

1798年、この年の日本は江戸時代の寛政十年にあたり、アメリカのペリー提督が来航する55年前になります。同年、29歳のナポレオンが始